

## 《研究ノート》

# 木工芸における銘木の意義とその役割

—銘木とはなにか—

武庫川女子大学大学院生活環境学専攻科博士課程 岡田(泊里)涼子

## 1. はじめに

今日、様々な技術の進歩、機械化が進み、ものづくりや工芸の在り様も時代と共に変化を遂げていると感じられる。しかし、木工芸においては、一連の作業の中で、未だ伝統の技や手仕事が占める比率が高いように思われるが、そこには木工芸の技術上の性質と共に、素材である「木」の特質が大きく関わっていると考えられる。木工芸に携わるものの目線で「木」の特殊性を述べようとする際、「銘木」という言葉がそれらを総体的に象徴しているように思われる。また、「銘木」の存在や魅力が木工芸家に与える影響というものは、作品の質そのものに深く関わることであり、大変興味深く感じてきた。本研究では、木工芸における「銘木」の存在とその意義を明らかにし、そこから生まれる美や美意識を探ることを目的としている。

筆者は、制作者の立場から木工芸の研究に携わってきたが、より深い研究を目指す為、関連する様々な分野を含めた木工芸の学術的分析を行う必要性を感じている。その活動の序盤であり、内容も浅いものではあるが、これまでの研究結果をここに研究ノートとしてまとめたいと思う。本研究ノートにおいては、まず「銘木」という概念が生まれた背景を知るために、第2章にて「霊木」「神木」、あるいは巨樹、巨木といった言葉を手掛かりに、日本の風土と木の関わりを検証していきたい。次に第3章で、既往文献などから、既存の「銘木」の定義を探り出した上で、筆者自身が木工芸家として、先人から学んだことや肌で感じてきたことと比較し、検証を行うこととする。そして第4章では、今後の研究と創作活動の展望について述べる。

## 2. 日本の風土における木の役割

### 2.1 「霊木」「神木」の存在

日本は国土のおよそ7割を森林に覆われている。平成二十七年(2015年)、林野庁(農林水産省)『森林・林業・木材産業の現状と課題』によると、日本の森林面積は2,507万haとなっており、国土面積3,779万haの66%にあたる。勾配が急な山地と河川に恵まれ、高温多湿な風土は、良質で多種の樹木を育ててきた。我々の祖先は、昔からその樹木から木材を伐り出し、生活道具、建築、調度品などを造形してきた。それは、暮らしやすさを求

めた機能的なものから、精神的な豊かさ、美しさを求めたものまで千姿万態であるが、いずれも、日本という小さな島国の、その独特な風土と気質の中で、人々が木に対して特別な感情を抱いてきたことがうかがえる。

その特別な感情のあらわれとして、各地に「霊木」「神木」の存在が見られる。土地土地に、樹木にまつわる伝説や言い伝えがあり、樹木を神や精霊の化身のごとく祀り仰ぐ。そこに、日本人の自然に対する思考が現れているように感じられる。

瀬田勝哉によると、『古事記』や『日本書紀』においてすでに、樹木にまつわる話は登場しており、『今昔物語』では樹木伐採に関する物語が二話描かれている（瀬田勝哉 2000:5-14）。永積安明、池上洵一による口語訳で詳しく見てみると、ひとつめの説話は、「近江国栗太郡大きな柞はほその語第三十七」（卷第三十一）である。柞はほそは現在では柞いすのきと読むことが一般的である。近江の栗太郡にその柞いすのきの巨木があった。その影は隣国丹波や伊勢にまでとどくほどであった為、田畠を作ることができない。困った農民達は天皇に訴え、その巨木を伐ってもらったという（永積安明、池上洵一 1968:274）。ふたつめの説話は「推古天皇、本元興寺を造り給う語第二十二」（卷第十一）、元興寺つぎの槻けやき※1の巨木にまつわるもので、推古天皇がその地に堂を建てる為、この木を伐らせようとしたところ、斧を入れた者達がたちまち死んでいったというのである。一人の僧がある晩、その木の空洞から「もし麻苧あさおで作った注連しめをひきめぐらし、中臣なかとみの祓はらえを読み、縄墨をかけて伐る時は、われわれの方策も尽きてしまう」という声を漏れ聞き、その方法で伐らせたところ、一人も死ぬことなく伐ることが出来た。木が伐られた際、おそらく僧が立ち聞きした声の主達であろう五、六羽の鳥が飛び出したそうだと（永積安明、池上洵一 1966:68-71）。槻の巨木に住んでいた、精霊か何かの化身なのであろうか。

『今昔物語』の中でも、同じく伐られた巨樹の話ではあるが、前者は邪魔者のような扱いをされ、後者は脅威をもたらす存在として描かれおり興味深い。前者には巨木の「崇り」の要素は感じられないが、それでも、農民達が神に近い存在であった天皇に嘆願し、伐採してもらったという点で、「霊木」「神木」を畏れる気持ちがあらわれているように感じられるのである。

柳田国男は『遠野物語』の中で、かつて山間隔絶の地であった岩手県の遠野地方に伝わる昔話や伝説をまとめあげているが、その物語の多くからは、人々の自然に対する恐れや、目に見えぬもの、不思議な力への恐怖心が感じられる。佐藤誠輔による『遠野物語』の忠実な口語訳からひも解いてみると、第五十九話「遠野の赤河童」に胡桃の大木が登場する。赤い顔をした男の子（おそらく河童であろうと柳田は述べている）が、胡桃の木の間から覗いていた。そして、その胡桃の木はその後大木になった、というものである（柳田国男、訳 1992:114）。また、後年『遠野物語』に付加する形で『遠野物語拾遺』が刊行されている

※1 本研究ノートでは、銘木にまつわる事物を文化的知見から考察することを目的とする為、本文における樹種名は、出典文献内において「ケヤキ」「クスノキ」のようにカタカナ表記であっても、「檜」「楠」のように、全て漢字表記とする。

が、京極夏彦が書き改めたものによると、第七十話に栗の老木が登場している。九頭竜権現の境内には、栗の老樹が<sup>そび</sup>聳えていた。ここの権化様はこの栗の木に頭を乗せ、人身御供の女を喰ったと伝えられ、その木は「枕栗」などと呼ばれていたという。そして権化様の正体は、実はその栗の木自体なのだとも謂われている、という恐ろしいものである（京極夏彦, 柳田国男 2014:54）。どちらも、淡々とした短い話であるが、それが余計に恐怖心をあおっているかのようである。そしてどちらからも、木を単なる木としてではなく、人間の力の及ばない「何か」の化身として、畏れつつ崇めていることが伝わってくる。

南方熊楠は、「熊楠」という名を、藤白王子（現藤白神社）の境内にある楠神社から授かっている。それは出身地である南紀特有の風習であったが、南方自身はその自伝の中で、「楠の樹を見るごとに口にいふべからざる特殊の感じを發する」と述べているように、生まれ育った環境が、深く思想に影響を与えたことがわかる（南方熊楠 1971:439）。

南方の隨筆集の中に「巨樹の翁の話」という一節がある。紀州日高郡上山路村大字丹生川<sup>にゅう</sup>の西面導氏<sup>さいめおさむ</sup>から、大正九年（1920年）に、龍神村小又川の二不思議として聞いた説話から構成されたものである。ひとつめはコサメ子女郎という怪<sup>かい</sup>が美女に化け、淵辺に来るものを一緒に泳ごうと誘っては、水中で殺して喰うという話である。そしてふたつめの話が巨樹に関するもので、以下に要約する。

東のコウ（谷）のセキ（谷奥で行きつきるところ）に大ジャという地があり、いにしえ数千年の大樫があった。性根のある木だったので、長年伐られなかったのだが、やむをえず伐ることになり、8人の樵夫達とカシキ（炊夫）が山に入る。あともう少しで切り倒されるという時に、疲れ果てた樵夫達は我慢が出来ずに山小屋へ戻ってしまう。翌日また大樫のもとに行ってみると、前日伐ったはずの切疵<sup>きず</sup>がすっかり元通りになっている。こんなことが2日ほど続くので夜中に見に行くと、一人の僧がやって来て、切り屑をいちいち拾い、これはここ、それはそこと継ぎ合わせていくのである。ある樵夫の提案で、屑片<sup>こつぱ</sup>をすべて焼き尽くしてしまうと、僧も継ぎ合わせることが出来ず、ついに大樫は切り倒されてしまった。その夜、山小屋では大宴会となり、皆酔い潰れて眠ってしまったところへ、かの僧が扉を開いて入って来た。そして一人ずつ布団をめくり、コイツは組親か、コイツは次のやつか、と言っては手を突き出し、さてコイツはカシキ（炊夫）か、おいてやれと言って失せ去る。翌朝、炊夫が朝食を準備し、樵夫達を呼ぶが応答しないので見てみれば、皆死に耐えていたという。南方は、「かの大樫は山の大神様の立て木、または遊び木だったのであろう」と述べている（南方熊楠 1969:71-72）。

また、「巨樹の翁の話」の中で南方は、「それがおいおい人間も殖え、生活上の必要から家を建てて田畠を開くに大木が必要となり、または邪魔になるよりこれを伐らねばならぬ場合に及んで、旧想を守る者は樹神が崇りをなすを恐るところから、巨樹の翁の譚などできたのだ。」（南方熊楠 1969:80）と述べている。明治時代末期の神社合祀政策に対し、南方は激しい反対運動を行った。「引作神社の大楠」が、合祀により伐採されることになった際、南方はそれを阻止すべく当時内務官僚であった柳田国男に協力要請の手紙を書いた

(松井竜五, 岩崎仁 2005:52-53)。南方の必死の思いが通じ、この巨樹は伐採を免れたものの、神社合祀によって、多くの神社と共に「霊木」「神木」や神社林が消滅してしまったという。投獄されてまでも、断固として意義を唱え続けた南方の姿勢からは、博物学者として、環境破壊や生態系の崩壊を危惧すると共に、人々の心の拠り所としての「霊木」「神木」や、鎮守の森を守らねばならぬという、ひとりの人間としての強い思いを感じることが出来る。

南方は「巨樹にもし言葉があれば、樹下にたたずんだ人、行き過ぎた旅人など、さまざまな話が聞けるだろう」と考えていたという(南方熊楠顕彰館 <http://www.minakata.org/>)。時代の流れの中で、環境や人との関係性に変化がおり、巨樹、巨木の類も減少していることだろう。しかし、南方の言う巨樹への憧憬のような感情は、現代に生きる我々にも共感できるものである。

現存する巨樹の中にも、歴史上の人物が植樹した、あるいは何らかの形で関わったという伝説を持つものが多くみられる。昭和六十三年(1988年)、環境庁(現環境省)が行った「巨樹・巨木林調査」において日本一の巨樹とされた、鹿児島県始良市の蒲生八幡神社境内にある大楠<sup>※2</sup>は、推定樹齢が約1600年にもなるという。この楠は、和気清麻呂が当地を訪れた際、手にしていた杖を地に刺したものが根付いたとされている(蒲生八幡神社公式ホームページ <http://www.kamou80000.com/>)。また、栃木県那須原の塩原八幡宮の社殿前にある杉の巨樹は、2本の木が根元部分で接合したものであるが、樹齢は約1500年といわれている。この杉は、八幡太郎(源)義家が東北平定の折、勝利祈願に箸を地に刺したものが根付いたという伝説を持っている。そして東京の善福寺の銀杏の巨樹は、親鸞上人が杖を刺し根付いたものだといっているのである(大貫茂 2002:62, 72)。杖や箸を地に刺すという行為に、何か特別な意味があるようにも思われるが、歴史上の功名な人物への敬意がそのまま巨樹への信仰心と重なっていると考えられる。

以上、『今昔物語』から<sup>いすのき</sup>柞と櫨、民俗学の大家である柳田国男の『遠野物語』の世界からは胡桃と栗、南方熊楠の著作からは櫨、そして現存の楠と杉、銀杏の巨樹の話を紹介したが、他にも全国各地に、枚挙にいとまがないほど多くの伝説や民話が見られる。常識的な考えでは全く信じ難いような話や、歴史に関わる出来事など多様であるが、人々の「霊木」「神木」に抱く思いが感じられる。日本の風土の中で、木は生活に必要な素材であると同時に、人々の信仰対象であったり、自然から人への訓戒を告げる存在であったということがわかる。

---

※2 クスノキには「樟」と「楠」の漢字があり、「楠」はクスノキではなく、中国やベトナムに生息するタブノキを指し、「樟」がクスノキであるという説や、中国では「樟」をタブ、「楠」をクスノキにあてるという説、または樟脳を採取可能なものを樟、不可のものを楠とすることもするという(上原敬二 1961:1-1152)。しかし、日本では、「樟」と「楠」を区別せずクスノキを指し、タブノキは「榿」とすることが多い(佐道健 2005:131)ことから、本研究ノートでは、筆者が慣用する「楠」に統一し表記することとする。

## 2.2 日本人と自然との関係

イギリスの歴史家、トマス・パケナムは、著書『地球のすばらしい樹木たち』(2003)の中で、地球上の60箇所の巨樹、奇樹、神木を訪ねているが、そのうちの5箇所が日本の木である。鹿児島県屋久島の縄文杉、静岡県熱海市の楠、佐賀県武雄市の楠、鹿児島県霧島市の杉、東京都善福寺の銀杏である。パケナムは、日本では、神聖で荘厳な雰囲気をつたえる神木が、小さな街や都市郊外の、参拝客でにぎわう神社の境内や、別段景観に気を配っているとも思えない、チェーン店やコンクリートの電柱が林立し、電線が錯綜するような街並みのすぐ近くで、人々から慈しまれているケースが比較的多いことに驚いている。

樹木に神聖な魂が宿ると考えられ、縄飾りや白い紙飾りがつけられている。日本人旅行者はバスツアーでこういった神社などを訪れ、木の魂に向けて黙禱したり、感嘆してじっと見入ったりしている。現代の日本人は欧米人たちとまったく変わらない服装をしているが、昔とかわらず微笑みながらお辞儀をするのをわたしはすばらしく感じた。(トマス・パケナム 2003:105)

パケナムの視点から、小さな島国である日本が、独特の気質、神木や霊木との関わりかたを持っているという事実を、改めて認識させられる。広大な大地や深い森に、聖なる巨樹、神木を訪ねるのは違い、日本人にとっては、身近で生活に密着した存在であることがわかる。

日本人の自然に対する考え方に関して、小原二郎は、他民族と比較した上で、日本人と木のつながりがいかに特別であるかを述べている(1972)。その中で、加藤周一が「日本における芸術思想の展開」(1971:105-108)で述べる説を根拠に、日本では、「人と自然の水平関係が、直接、媒介者なしにつながっている」(小原二郎 1972:26)と結論付けており、筆者は共感をおぼえる。自然の厳しい大陸では、人は自然の猛威と闘い、克服あるいは制圧しようとするが、日本のように比較的温暖で穏やかな風土においては、自然を受け入れ共存してきた。樹木に限らず、自然物のあらゆるものに神が宿ると考える日本人にとって、神を祀ること、自然を敬うこと、人が生きることは境界がなく日常であり、決して特別なことではなかったのかもしれない。そして、その自然崇拜の中でも樹木、特に大木、巨木の類からは生命の力強さ、神秘性を感じさせられる。巨木信仰は、日本人の自然観の象徴のようなものなのかもしれない。

## 2.3 「木霊」の存在

「霊木」「神木」は木が生命を持った立木の姿を指す。「霊木」「神木」と呼ばれる木は、前述の「蒲生の楠」や「塩原八幡宮の杉」、「善福寺の銀杏」のように、並外れた樹齢の巨木、大木が多い。しかし、国土の7割が森林であっても、そうそう高樹齢の大木にお目にかかれるものではない。生物の中では、総体的に木は長寿命であるが、樹種によってより寿命の長いもの、短いものがあり、楠や樺などは寿命が長い種とされている。先に挙げた

環境庁が行った「巨樹・巨木林調査」(1988)における「全国巨木リスト(上位60本)」の中では、楠が33本と半数以上を占め、次いで杉の11本、銀杏、桂の5本、樺の2本と続いている。この調査は樹木の主幹の幹周を計測し、数値の大きいものからリストに挙がっている。樹種によって成長過程や組織に特徴がある為、必ずしも幹周の大きさと樹齢が比例しているということではないが、樹種に関わらず、並外れた巨樹、巨木が平均樹齢と比べ、並外れて高齢であることに疑いの余地はないであろう。

巨樹、巨木を前にした時、自然現象による倒木、あるいは伐り倒され木材となった姿にも、人々は特別な感情を抱く。立木だった時には見えなかった年輪、杻目が現れ、木の個性が見えてくるのだ。それは、人間がひとりひとり、顔だちが違うように、木の年輪や杻目も一本一本違っている。木材となり始めてわかる木の履歴書のようなものである。その木がどのような環境で、どのように育ってその生命を生きたのかを知ることができる。人間の寿命を遥かに超えた年月を生き、歴史を目撃してきた樹木に、己の小ささを感じ憧れを抱くのかもしれない。

木は決して声を発しはしないが、多くのことを語りかけてくるように感じられる。例えば、巨樹から製材された一枚板のテーブルには、どんな洗練されたデザインや進化した技術も及ばない、「何か」による魅力に引き付けられる感覚がある。自然によって造り出された形はそれだけで美しく、人が手を加える余地を与えない。自然の造形を真似て、本物そっくりに杻目をプリントした合板では、「何か」を感じることはほとんどない。この「何か」とは、木の生命力や時間の重みのようなものであり、「木霊<sup>こだま</sup>」という言葉があてはまるのかもしれない。

日本の木に関わる文化の発展は、鉋や鋸などの刃物や道具の発達、またそれに付随する鍛冶や木挽きなどの職人の文化、砥石や材木を扱う商いなど、世界の中でも独特且つ優れた技術や知識に拠るものと思われる。それは、「霊木」「神木」や「木霊」というような概念を、人々がなんとなくではあっても自然に受け入れられるという風土が、木は単なる素材ではないことを、当然の認識とする土台を築いているからではないだろうか。『日本書記』神代の巻において、素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>は、自らの体毛を使って、杉、檜、榎、楠を生み出し、檜は宮殿に、杉と楠は船に、榎は棺に使うように教えたという(小原二郎 1972:9)。人間の個性や性格を指して、人柄と言うことがあるが、木には木柄という言葉を使う。それぞれの樹種や個体の違いによる木柄を読み取り、適材適所に使用することで、日本の木の文化は世界に誇る造形物を生み出してきたものと考えられる。

### 3. 銘木の定義

#### 3.1 樹種による特性と個体差

先にも述べたように、日本の高温多湿の気候は、多種で良質の木が育つのに適していると考えられている。鈴木啓三によると、地球上には約8,000種の樹種が存在し、日本には

そのうちの約 2,200 種もが生息しているという（鈴木啓三 2008:44）。確かに、この小さな国土の中で、地球上にある樹種のうちの 4 分の 1 以上が生息しているというのは驚異的なことである。樹種によってその性質に特徴があり、日本人の祖先は古くからそれを見極め、適した場所で用いてきた。前項にて、『日本書記』の中で自らの体毛で樹木を生み出した素戔嗚尊は、樹種による使い分けを教えたと言ったが、『日本書記』が書かれた奈良時代にすでに、我々の祖先が、樹種による用途の違いに関する知識を持っていたということに他ならない。約 2,200 種もの中から、建築や家具、工芸などそれぞれに最適な材料を選び出していく中で、よく使われる樹種、または使いやすい樹種といった選別がなされてきたのである。

木は同じ樹種の中でも、個体差というものがある。例えば、素戔嗚尊が檜は宮殿に用いよと告げたように、今日でも、伊勢神宮をはじめとする名立たる日本建築の材料として用いられている。檜は一般的に、杢目が通っていて緻密であり、素直で狂いが少なく芳香性もあることなどから、優良材、高級材とされている。しかし、檜だからといって全ての樹木が緻密で素直なわけがなく、ひねくれて曲がっているもの、杢目が荒々しいものもあって当然なのである。

木にまつわる職人や技術者、または使用者、愛好家達は、こうした樹種、または同樹種の中でも特に優れた個体を求めてきた。それらは、いわゆる「銘木」と呼ばれ、その存在は、日本の木の文化の独自性を構成する要素のひとつと考える。また、「銘木」とは、木そのものを指すだけでなく、「霊木」や「神木」のように木を崇め、木に「木霊」の存在を感じるような、日本人の木に対する概念のひとつであるとも考えられるのではないだろうか。

本研究では、まずこの「銘木」の存在に、日本の木の文化だけでなく、日本人の美意識を象徴するものが含まれていると想定する。筆者は木工芸に従事し木と関わってきた。そこから学び、感じてきたことをふまえ、木工芸における「銘木」の定義を明らかにし、意義を見出すことを研究の目的とする。環境や人々の価値観が著しく変化していく中で、木工芸、あるいは人と木の関係性の今後の在り方を探りたいと考える。

### 3.2 銘木の概念の歴史

そもそも、「銘木」という言葉や概念はいつから存在していたのか。旺文社の古語辞典（2001）にて「銘木」を検索すると、鎌倉時代の建長六年（1254 年）、橘成季による世俗説話『古今著聞集』の草木第二十九にある「其木左右なき名木にていまだあり」「彼の亭に貞信公の、まさしく手自<sup>てづから</sup>うへ給へる名木あり」という文にいきつく。ここでは、「名木」と表記されているが、これは本研究内で使用している「銘木」と同語として扱う。『古今著聞集』における「名木」とは、特別な、高貴などというような意味で使用されており、樹種や性質は問題ではなく、「身分の高い人が植えた」ということで崇められ、「名木」と認識されていると見受けられる。

しかし、これより以前、奈良時代から正倉院宝物内の木工芸作品において、「銘木」とし

での存在感を十分に現在に伝えるものが多く存在している。正倉院の宝物は、天皇をはじめとする上層階級にのみ使用、または鑑賞を許されたものであったため、一般的でなかったことは確かであろう。しかし、一部の限られた階級と職人の中では、実用的というよりはむしろ、木材の美しさを主眼とした「銘木」の概念が存在していたと言えるだろう。

平安時代には、装飾性の高いものが好まれるようになり、螺鈿や蒔絵などの漆芸が盛んになった。そのため、素木のままの美しさをいかした木工芸の名品はあまり見られない。

室町時代には茶の湯が登場し、木工芸にも大きな影響を与える。茶の湯の「わび」「さび」の思想は装飾性を極限まで排除し、茶室に合った質素な雰囲気の木工作品を生み出している。素木のままで美しい木材が求められ、「銘木」の概念はこの時代に大きく変化した。あるいは、それまでの概念へ新たな概念が付加されたと考えられる。

全国銘木連合会から昭和六十一年（1986年）に発行された『銘木史』の中で、江戸時代の商売風俗の解説書に、「床柱、床板、框などに使う良材を売る店を銘木店という」と記されているらしいが、出典が確かめられないという記述がある。（銘木史編集委員会 1986:49）しかし、この当時は幕府による奢侈禁止令しやしきんしれいにより、一般住宅に床の間などを設けることが禁じられ、質素な板葺き住宅が主流であったといわれている。従って、もし江戸時代に「銘木店」といわれるものが本当に存在していたとしても、一部の上層階級の中で扱われていた、特別な建築様式に使用するための木を扱うための商売であったと捉えられる。そして、木工芸の分野でいえば、それまでは名もなき職人達が技を継承してきた世界であったが、江戸時代中期以降、小林如泥じょでい（1758-1813）が出現し、職人が作家性を持ち始める。作品に作者の意匠が表現され始め、使用木材への意識もそれまでとは違ったものに変化していったのではないかと考えられる。

そして、明治時代の文明開化とともに、建築様式の変化や技術革新がおこり、木材の流通にも大きく影響を及ぼす。大型製材機械が導入され、大木を短時間で挽くことが可能になり、「銘木」の流通量も劇的に多くなった。現在の銘木商の元となる商売が出現し、「銘木」という言葉が少しずつ一般化していったという。

現代において「銘木」という言葉自体は一般化しているかもしれないが、その意味や概念はおそらく、捉え方や視点によって非常に大きな差異があると思われる。例えば、同じく銘がつくものに茶や石、刀などが挙げられる。その中でも茶は現代の日本人にとっては非常に身近で一般的なものであるため、「銘茶」といえば、高級で大変美味しい茶のことと考える。しかし、それはあくまでも素人の表面的な見解であり、高級であることや美味の本意を追及しなければ、「銘茶」を理解したことにはならないのかもしれない。また、茶葉の種類、茶を飲む場面や人などによって、淹れ方やしつらいまでも考慮せねばならず、場合によっては、「銘茶」ではなく、ごく一般的な茶葉の方が喜ばれることもあるだろう。質と概念は必ず一致せず、それを見極めることで「銘茶」に本当の価値が生まれるのではないだろうか。

「銘木」にも同じことが言える。おそらく江戸時代に入り、材木商が特に美しい材や珍

しい材を「銘木」として取り扱い、流通させたものが「銘木」として一般的に知られるところになったのであろう。それはごく一部の富裕層が、富の象徴のように家屋内に施し流行させたものであった。現在、一般的に通用している「銘木」の意味合いは、これに近いと思われる。しかし、それ以前の正倉院宝物や、室町時代の木工芸に見られる「銘木」は、それらとは確実に違う意味を持っていると感じる。同じように柰目の美しい珍しい木材であっても、趣や印象が違って見えるのは、そこにある「銘木」への概念が違っているからと考えるのである。

### 3.3 「銘木」に関する既往文献

日本は「木の文化」であるといわれるため、木に関する文献は多く見られる。筆者がこれまでに参照したものでは、主に「木工芸」に関する文献が16件、「木の文化」に関する文献が10件、「樹木」に関する文献は7件、「木材」に関する文献が7件であるが、筆者の研究歴の浅さから考え、これらはおそらくほんの一部であると認識している。しかし、本研究の主題である「銘木」について書かれた文献、資料の収集には最も時間を割いているが意外に困難であり、その中でも、学術的にまとめられたものとなれば、更に限られてくる。筆者が認識出来たものは10件、内容が確認出来たものが7件である。また、7件のうち本研究において有効と思われるものは2件であり、1件目が、日本における木工芸の有史上、始まりにあたると言える正倉院宝物の木工芸品を、宮内庁の依属により調査しまとめられたもので、昭和五十三年（1978年）に発行された『正倉院の木工』である。この調査は昭和四十七年から四ヶ年にわたり行われた、正倉院の木工品に対する材種的、技法的見地からの詳細な調査の記録である。調査参加者としては、竹内碧外（木工作家 記録作成等の措置を講ずべき無形文化財（唐木技法）技術者）、氷見晃堂（木工作家 重要無形文化財（木工芸）保持者）、嶋倉巳三郎（元奈良教育大学教授 理学博士）、木内武男（東京国立博物館法隆寺宝物室長）の4名の名が挙げられている。

この調査の報告として、竹内碧外が「正倉院木工品の特質—用材と技法について—」（1978:77-89）の中で、主要な使用木材39種についての説明と、「正倉院木材材鑑目録」として材種、産地、用例、備考を記したものがあつた。また、嶋倉巳三郎も「正倉院木工品の樹種について」（1978:111-128）として、竹内と比較すると、やや科学的な見地から述べている。

竹内、嶋倉どちらの文献にも「銘木」についての明確な記述は見当たらないが、正倉院宝物に関しては、技術、材料ともに最高峰であつたという周知の事実と、専門家によってその樹種や使用例が長時間かけ調査されたという重要性を考慮したうえで、全使用木材を銘木として捉えること出来ると考える。

そしてもう1件が、前項でも挙げた、全国銘木連合会により昭和六十一年（1986年）に発行された『銘木史』である。『銘木史』は、建築材を主眼とした銘木の成り立ちや歴史がまとめ上げられた、大変貴重な文献である。銘木・材木商の見地から、日本で流通してき

た木材や、その特徴が樹種ごとに詳細に述べられている。建築における銘木の扱いには、時代による流行や、一部階層による好みなどの影響が色濃くあり、その影響は木工芸にも及んでいると考えられる。

『正倉院の木工』は、木工芸の歴史や、その中で使用木材の傾向を知ることが出来る。『銘木史』は、個人研究のレベルでは到底網羅できない、膨大な数量の木材についてのデータが記載されている。両文献は、本研究をすすめていく中で、非常に有効な文献として挙げておきたい。そして、両文献、または他の文献も含めて要約をしたものを参考に、本研究の結果を導きだし、「銘木」の目録を新たに作成したいと考えている。

### 3.4 建築材としての銘木の定義から見えてくるもの

現在の木材の流通をみると、その形態から、大多数が建築用として製材されていることがわかる。「銘木」に関しても、流通経路が違っただけで、製材方法は同じであるため同様のことがいえるであろう。木工芸家は、床板を机の天板に、敷居材を脚にというように、建築材として挽かれた材木から、必要な部材を木取っていくのである。しかしながら、建築での木材に対する概念、使用方法と、木工芸におけるそれらとは、作品のスケール感の違いだけではないものがあるように思われる。その違いとは何かを探ることが、「銘木」への理解を深める糸口になると考えるため、ここでは、交易財団法人日本住宅・木材技術センターによる、銘木の定義を引用し検証してみたい。

- (1) 材面の鑑賞価値の極めて高いもの (例 杔板、糸まきの板)
- (2) 材の形状が非常に大きいもの (例 大径丸太、長尺一枚板)
- (3) 材の形状が極めてまれなもの (例 サクラツツジ)
- (4) 材質がとくに優れているもの (例 木曾ヒノキ)
- (5) 類まれな高齢材 (例 イチイ)
- (6) 入手がかなり困難な天然木 (例 天然カラマツ)
- (7) 類まれな樹種 (例 ビャクダン)
- (8) 由緒ある木 (例：春日局櫓)

((公財)日本住宅・木材技術センター <http://www.howtec.or.jp/test/meiboku.html>  
2016年8月28日参照)

(1)「材面の鑑賞価値の極めて高いもの」とは、杔目が美しいもの、あるいは珍しいものを指す。杔目はその特徴によって分類され名前が付けられている。よく見られるものを挙げると、ひとつは円状の杔目が特徴的な「玉杔」である。これは櫟や玄圃梨<sup>けんぼなし</sup>などの樹種によくあらわれる杔である。一面に円状の杔目が幾重にも広がり、華やかな雰囲気のある杔であるが、小さい円が点々と散ったような上品なものもある。「縮杔」もよく見ることができた杔目である。これは圧倒的に、柎の木によくあらわれる杔である。木の繊維方向と直交するように出たため、鉋で表面を平らに削っても、板が波打っているかのような錯覚を与えるところが面白い。その他にも多数の杔目があるが、ここでは、それがはっきりと鑑

賞に値する程度にあらわれたものを銘木と定義するものと解釈出来る。いずれの杓目も、見た者にまず、視覚的な驚きを与え、生命の不思議さを感じさせるが、同じ杓でも、奇異に感じる場合もあり、個人の好みが顕著であることが多いようにも思われる。

(2)「材の形状が非常に大きいもの」とは、大木、巨木から挽かれた丸太や材を指す。建築材においては、特に床の間の床板など、「ハレ」を象徴する意味合いもあり、生命力の象徴とも思えるような、幅広の一枚板が求められていた。現在では住宅事情が変化しているため、一般住宅にこのような大きな材を使用すること自体が貴重な事例であると思われるが、いずれにしても、人々の巨木信仰にも繋がっていると考えられる。

(3)「材の形状が極めてまれなもの」に関しては、建築材としての特徴が出ていると感じられる。なぜなら、木工芸においては、木材を丸太状で使用することが通例ではないからである。つつじ系統などの原木の表皮を剥ぎ、磨いたものを床柱などに使用することが多いようである。板状ではない形態で「銘木」と定義づけられる点で興味深い項目である。

(4)「材質がとくに優れているもの」とは、木工芸の観点からみた「銘木」の条件にかなり近い項目であると思われる。木工芸において、見た目の美しさや珍しさよりも質の良さを木材に求める傾向があるように思える。木工芸では建築と比較すると、緻密で繊細な作業を要する。そのため、材木にもミリ単位での造作に耐えうることが最も重要視されるのである。

(5)「類まれな高齢材」とは、平均樹齢をはるかに超えた、並外れた老木を指している。これは、第2章で述べた「神木」「霊木」のような存在が当てはまるであろう。

(6)「入手がかなり困難な天然木」とは、市場にあまり出回らない、稀少価値の高い、植林によるものではなく天然の木材のことを指す。例に挙げられている天然落葉松は、現在ではほぼ、入手不可能といわれている。

(7)「類まれな樹種」も、(6)と同様に、稀少価値が高く、入手困難な樹種のことを指すと思われる。例にあげられている白檀は、日本にはない輸入材であり、かつ大変希少なものである。また黒柿などもこれに当てはまると思われる。柿の木の中で芯材に黒い模様が出るものが何本かに一本あり、その中でもまた、美しい模様のもを指す。かつては皇族や貴族階級にのみ、使用が許されていたという。

(8)「由緒ある木」は、第2章で述べたような、伝説や民話などが残り、信仰の対象となっているような樹木を指すと思われる。神社や寺院にある「神木」や、正倉院宝物の「蘭奢待」などもこれに当てはまるのではないだろうか。

以上、この「銘木」の定義を検証するにあたり、銘木、ひいては木材について筆者の知識不足を再認識した。更なる調査を行い、理解を深めることを今後の研究の課題の一つとしたい。

### 3.5 木工芸の現場から—木工芸家に師事

著者は大学を卒業した2001年春から、木工の実習助手として研究職に就く2006年春ま

での5年間、兵庫県三木市に工房を構える木工芸家、徳永順男<sup>としお</sup>に師事を仰いだ。著者が弟子入りをする数年前から師匠は、平成十三年（2001年）に行われた太宰府天満宮千百年大祭の御神宝として奉納する為、正倉院宝物「桑木木画碁局<sup>くわきもくがきよく</sup>」を復元した、「桑木画碁局<sup>くわもくがきよく</sup>」の制作にあっていた。技術の機械化が進んだ現代において、気が遠くなるような繊細な造作を、手作業のみでこなす姿は、木工芸の世界に足を踏み入れたばかりで、右も左もわからぬ者から見ても、驚異的に感じたことを記憶している。

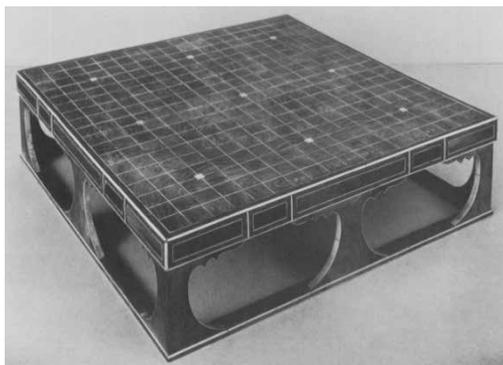


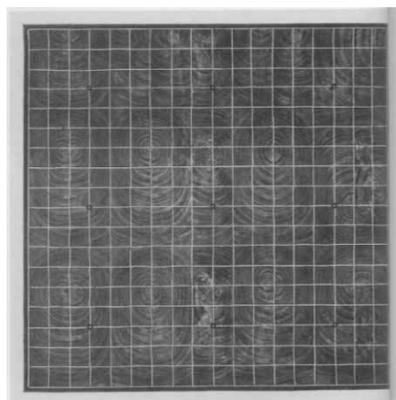
図1 桑木木画碁局<sup>したんかりぶそう</sup> 紫檀加里武莊 正倉院宝物庫所蔵  
(関根真隆『正倉院の木工芸 日本の美術6』1982:63)より転載

徳永が木工芸の道に入ったのは、著者と同じく大学を卒業してからのことである。職人の世界では遅いスタートにも関わらず、高度な技術や知識を習得していることに驚かされる。師匠は農学部出身で、菌の培養などの研究に携わっていたそうだ。生物や自然への関心が高かったことも相まって、木工芸を志すようになり、第2章で述べた『正倉院の木工』の著者の一人でもある、竹内碧外に弟子入りをした。竹内碧外は分野を問わず、あらゆる美に関して造詣の深い人物であったそうで、徳永は竹内から、木工芸の技術や知識に限らず、芸術に関わるありとあらゆることを学んだそうである。竹内が正倉院の調査に関わり、木材に関して学者並みの知識と資料を有していたことや、元来の木への愛着心もあって、徳永は若い頃より多くの木材、いわゆる「銘木」の収集を行っていた。徳永が「桑木画碁局」の制作を依頼された理由に、現存の木工芸家の中でも屈指の技術を持ち合わせていたことはもちろんだが、その材料となる「銘木」の在庫を持ち合わせていたことも大きいと思われる。木工芸家にとって、良い木に出会うことは、技術を磨くことと同様に大切なことであると教えられてきた。木との出会いはいつ巡ってくるかわからないし、一生出会えないかもしれない。たとえ出会えたとしても、それが手に入るかどうかわからない。木工芸の世界では、材料を揃えるところから制作の過程が始まっており、決してこちらの意のままにはならないのである。そこが他の工芸に比べ、困難で負担に思う点でもあり、魅力でもあるのかもしれない。

つい先日、師匠が「桑木画碁局」を制作するにあたって、主材となる桑を探し求めて銘

木商を訪ね歩いた苦勞話を初めて聞き驚いた(2016年8月3日聞き取り)。著者は弟子入りした直後から、師匠が収集してきた銘木の数々を見ていた為、「桑木画棋局」の材料も、そこから持ち出されたものと思いついていた。先にも述べたように、「桑木画棋局」は正倉院宝物の「桑木木画碁局」の復元である。「桑木木画碁局」は、盤面にわずか1mmの厚さの桑の小口面を貼り付けたところに大きな特徴がある。師匠の持ち物の中にも、桑材はいくらかあったが、この碁盤に適した材はなかったそうである。改めて「桑木木画碁局」の盤面を見てみると、約500mm四方の盤の中に芯持ちの小口面の円形が14~15個も見受けられる。つまり、100~150mm四方内に収まり、かつその中で年輪が美しく詰まった桑の丸太が必要になってくるということである。師匠は色々な方面に尋ねて回り、桑材を有しているという銘木商まで足を運んだが、なかなか適した材に行き着かなかったそうである。それというもの、もともと木材は、年輪の中心(樹心)から割れやすい為、材にする際は芯を外して板を取っていくので、芯持ち材自体が極めて稀なのである。芯持ちの桑材を探りあて訪ねて行っても、芯からパツカリと割れているか、割れはなくても年輪の間隔が100~150mm四方に年輪が詰まっていないかのどちらかであったそうだ。ほとんど困り果て、疲れ果てて銘木商を後にしようとした時、ふと倉庫の2階に目が向き、桑らしき材が目に入った。店主も忘れていたような木材を引っ張り出してくると、芯持ちでかろうじて割れも入っていない、年輪の詰まった桑材だったのだそうだ。もしその時に、師匠が2階に目が向かなければ、どうなっていたことだろうと考えると感慨深い。しかも、その桑材も反対方向からは割れが進んできていた為、必要最低限しか材がない状況であったということになる。

もう15年以上も前の話ではあるが、当時を思い返し、関西弁で「往生した」と語る師匠が、どこか楽し気に見えた。木工芸家と木の出会いとは、こういうことなのかもしれないと思わされた。



らでんばちるそう  
図2 桑木木画碁局 螺鈿撥鏤荘 正倉院宝物庫所蔵  
(関根真隆『正倉院の木工芸 日本の美術6』1982:63)より転載

#### 4. 銘木研究と木工芸家としての今後の展望

著者は、木工芸を志した際、木については全く無知の状態であった。立体造形が好きで、美術大学で彫刻を学んでいた為、ものづくりを仕事にしたいと思い、経緯はよく憶えていないが、木工芸というものを知った。今思えば、木工芸というよりも、木工家具に興味があったということなのかもしれない。しかし、縁あって師匠に出会い、幸いにも弟子入りすることが出来た。

木工芸に携わり感じてきたことは、人（制作者）と技術と、木の関係、バランスの重要性である。彫刻を学んでいた時は、人（自分）が先にあった。自分の思いや考えを形にすることが大切であるように感じていた。しかし途中から、自分よがりな造形物に何の意味があるのかと疑問を持つようになり、木工芸に出会った時は、その罪悪感のようなものが消え、自然と創作に向き合えるようになったのである。木工芸において重要なことは、人（自分）ももちろん大切であるが、同じくらい素材である木を大切にすることであると考えている。100年生きた木は、木材になってからも100年生きると教わってきた。まず木があり、そこに自分の思いと技術を合わせていく。そして、木が木材としての寿命を全う出来るようなものを作ることが、木工芸ではないかと感じている。もちろん、そのような技術や知識は、少々修行を積んだところで、得られるはずもない。筆者などは、言うに及ばない。しかし、木を知ること、木の魅力に触れられることこそが、木工芸家としての喜びでもあることは感じてきた。そして、そのような木への思いが、「銘木」の存在に魅せられるきっかけとなった。筆者のような若輩者には「銘木」を使った制作の機会がそうそう巡ってくるものではない。また、「銘木」の存在自体が、消えつつあるという危惧もある。それだからこそ、一木工家として「銘木」が築いてきた木工芸の流れの一端を、追及し記録に留めておきたいと考えているのである。

今後の展望として、日本の風土と木の文化の関係をより深く追及し、人々が木に惹かれ、「銘木」というものを生み出した要因に迫りたい。そして、木材産業や木工芸の歴史を探るとともに従事する職人や名工などの著書、インタビューなどから、「銘木」とはなにか、これからの「銘木」の在り方を導き出していきたいと考えている。

#### 【参考文献】

上原敬二 1961 『樹木大図説』 有明書房

蒲生八幡神社公式ホームページ <http://www.kamou80000.com> (2016年8月27日参照)

環境庁 1990 『巨樹・巨木林調査報告書』 [http://www.biodic.go.jp/kiso/13/13\\_kyoju.html](http://www.biodic.go.jp/kiso/13/13_kyoju.html)  
(2016年8月1日参照)

京極夏彦, 柳田国男 2014 『遠野物語拾遺 retold』 KADOKAWA

宮内庁正倉院事務所編 1978 『正倉院の木工』 日本経済新聞社

交易財団法人 日本住宅・木材技術センター

<http://www.howtec.or.jp/test/meiboku.html>

小原二郎 1972 『木の文化』 鹿島研究所出版会

佐道健 2005 『木へんを読む』 学芸出版社

鈴木啓三 2008 『木の国ニッポン』 グラフ社

関根真隆編 1982 『日本の美術 第193号 正倉院の木工芸』 至文堂

瀬田勝哉 2000 『木の語る中世』 朝日新聞社

「田屋の大杉と熊野神社」 <http://tonolink9.jimdo.com/> (2016年8月27日参照)

トマス・パケナム 2003 『地球のすばらしい樹木たち：巨樹、奇樹、神木』 早川書房

永積安明，池上洵一訳 1966 『今昔物語集1 本朝部』 平凡社

永積安明，島田勇雄校注 1966 『古今著聞集 日本古典文学大系84』 岩波書店

永積安明，池上洵一訳 1968 『今昔物語集6 本朝部』 平凡社

ふるさと元気風ネット ふるさと探訪記 「蒲生（かもう）のクス」

<http://www.osumi.or.jp/sakata/fukei/kamoukusu.html> (2016年8月27日参照)

松井竜五，岩崎仁 2005 『南方熊楠の森』 方丈堂出版

松村明，山口明穂，和田利政編 2001 『古語辞典[第九版]』 旺文社

南方熊楠顕彰館ホームページ <http://www.minakata.org/> (2016年8月27日参照)

南方熊楠 1969 『南方熊楠随筆集』 筑摩書房

南方熊楠 1971 『南方熊楠全集（全十二巻）第三巻 雑誌論考I』 平凡社

銘木史編集委員会 1986 『銘木史』 全国銘木連合会

柳田国男（佐藤誠輔訳） 1992 『口語訳 遠野物語』 河出書房新社

林野庁 2015 『森林・林業・木材産業の現状と課題』

[http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/genjo\\_kadai/](http://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/genjo_kadai/) (2016年8月1日参照)